修禅寺物語

岡本綺堂

（伊豆の修禅寺（しゅぜんじ）に頼家（よりいえ）の面（おもて）というあり。作人も知れず。由来もしれず。木彫の仮面（めん）にて、年を経たるまま面目分明ならねど、いわゆる古色蒼然（そうぜん）たるもの、観（み）来たって一種の詩趣をおぼゆ。当時を追懐してこの稿成る。）

登場人物

面作師（おもてつくりし）　夜叉王（やしゃおう）

夜叉王の娘　かつら

同　かえで

かえでの婿　春彦

源左金吾（げんざきんご）頼家

下田五郎景安（かげやす）

金窪兵衛尉行親（かなくぼひょうえのじょうゆきちか）

修禅寺の僧

行親の家来など

第一場

伊豆の国狩野（かの）の庄、修禅寺村（今の修善寺）桂川のほとり、夜叉王の住家。

藁葺(わらぶ)きの古びたる二重家体。破れたる壁に舞楽の面などをかけ、正面に紺暖簾(こんのれん)の出入口あり。下手に炉を切りて、素焼の土瓶(どびん)などかけたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹。そのうしろは畑を隔てて、塔の峰つづきの山または丘などみゆ。元久元年七月十八日。

（二重の上手につづける一間の家体は細工場(さいくば)にて、三方に古りたる蒲簾(がますだれ)をおろせり。庭さきには秋草の花咲きたる垣(かき)に沿うて荒むしろを敷き、姉娘桂、二十歳。妹娘楓、十八歳。相対して紙砧(かみぎぬた)を

擣（う）っている。）

かつら　（やがて砧の手をやめる）一晌（いっとき）あまりも擣ちつづけたので、肩も腕も痺（しび）るるような。もうよいほどにして止（や）みようでないか。

かえで　とは言うものの、きのうまでは盆休みであったほどに、きょうからは精出して働こうではござんせぬか。

かつら　働きたくばお前ひとりで働くがよい。父様（ととさま）にも春彦どのにも褒（ほ）められようぞ。わたしはいやじゃ、いやになった。（投げ出すように砧を捨つ）

かえで　貧の手業に姉妹が、年ごろ擣ちなれた紙砧を、とかくに飽きた、いやになったと、むかしに変るお前がこのごろの素振りは、どうしたことでござるかのう。

かつら　（あざ笑う）いや、昔とは変らぬ。ちっとも変らぬ。わたしは昔からこのようなことを好きではなかった。父さまが鎌倉においでなされたら、わたしらもこうはあるまいものを、名聞を好まれぬ職人気質とて、この伊豆の山家に隠れ栖、親につれて子供までも鄙にそだち、しょうことなしに今の身の上じゃ。さりとてこのままに朽ち果てようとは夢に

も思わぬ。近いためしは今わたしらが擣っている修禅寺紙、はじめは賤しい人の手につくられても、色好紙とよばれて世に出づれば、高貴のお方の手にも触るる。女子とてもその通りじゃ。たとい賤しゅう育っても、色好紙の色よくば、関白大臣将軍家のおそばへも、召し出されぬとは限るまいに、賤の女がなりわいの紙砧、いつまで擣ちおぼえたとて何となろうぞ。いやになったと言うたが無理か。

かえで　それはおまえが口癖に言うことじゃが、人には人それぞれの分があるもの。将軍家のお側近う召さるるなどと、夢のようなことをたのみにして、心

ばかり高う打ちあがり、末はなんとなろうやら、わたしは案じられてなりませぬ。

かつら　お前とわたしとは心が違う。妹のおまえは今年十八で、春彦という男を持った。それに引きかえて姉のわたしは、二十歳という今日の今まで、夫もさだめずに過したは、あたら一生を草の家に、住み果つまいと思えばこそじゃ。職人風情の妻となって、満足して暮すおまえらに、わたしの心はわかるまいのう。（空嘯く）

（楓の婿春彦、二十余歳、奥より出づ。）

春彦　桂どの。職人風情とさも卑しい者のように言わ

れたが、職人あまたあるなかにも、面作師（おもてつくりし）といえば、世に恥かしからぬ職であろうぞ。あらためて申すに及ばねど、わが日本開闢（かいびゃく）以来、はじめて舞楽のおもてを刻まれたは、もったいなくも聖徳太子、つづいて藤原淡海公、弘法大師、倉部（くらべ）の春日（かすが）、この人々より伝えて今に至る、由緒（ゆいしょ）正しき職人とは知られぬか。

かつら　それは職が尊いのでない。聖徳太子や淡海公という、その人々が尊いのじゃ。かの人々も生業（なりわい）に、面作りはなされまいが……。

春彦　生業にしては卑しいか。さりとは異なことを聞くものじゃの。この春彦が明日にもあれ、稀代の

面(おもて)をつくり出(いだ)して、天下一の名を取っても、お身は職人風情と侮(あなど)るか。

かつら　言(お)んでもないこと、天下一でも職人は職人じゃ、殿上人や弓取りとは一つになるまい。

春彦　殿上人や弓取りがそれほどに尊いか。職人がそれほどに卑しいか。

かつら　はて、くどい。知れたことじゃに……。

（桂は顔をそむけて取り合わず。春彦、むっとして詰めよるを、楓はあわてて押し隔てる。）

かえで　ああ、これ、一旦こうと言い出したら、あくまでも言い募るが姉(あね)さまの気質、逆ろうては悪い。

いさかいはもう止してくだされ。

春彦　その気質を知ればこそ、日ごろ堪忍していれど、あまりと言えば詞（ことば）が過ぐる。女房の縁につながりて、姉と立つればつけ上り、ややもすればわれを軽しむる面憎（つらにく）さ。仕儀によっては姉とは言わさぬ。

かつら　おお、姉と言われずとも大事ござらぬ。職人風情を妹婿に持ったとて、姉の見得（みえ）にも手柄にもなるまい。

春彦　まだ言うか。

（春彦はまたつめ寄るを、楓は心配して制す。この時、細工場の簾のうちにて、父の声。）

夜叉王　ええ、騒がしい。鎮（しず）まらぬか。

（これを聴きて春彦は控える。楓は起って蒲簾をまけば、伊豆の夜叉王、五十余歳、烏帽子（えぼし）、筒袖（つつそで）、小袴にて、鑿（のみ）と槌（つち）とを持ち、木彫の仮面（めん）を打っている。膝（ひざ）のあたりには木の屑（くず）など取り散らしたり。）

春彦　由なきことを言い募って、細工のおさまたげをも省みぬ不調法、なにとぞ御料簡（ごりょうけん）くださりませ。

かえで　これもわたしが姉様に、意見がましいことなど言うたが基（もとい）。姉様も春彦どのも必ず叱（しか）って下さりまするな。

夜叉王　おお、なんで叱ろう、叱りはせぬ。姉妹の喧嘩（いさかい）はままあることじゃ。珍らしゅうもあるまい。時に今日ももう暮るるぞ。秋のゆう風が身にしみるわ。そちたちは奥へ行って夕飯（ゆうまま）の支度、燈火（あかり）の用意でもせい。

二人　あい。

（桂と楓は起って奥に入る。）

夜叉王　のう、春彦。妹とは違うて気がさの姉じゃ。同じ屋根の下に起き臥（ふ）しすれば、一年三百六十日、面白からぬ日も多かろうが、何事もわしに免じて料簡せい。あれを産んだ母親は、そのむかし、都の

公家衆に奉公したもの、縁あってこの夜叉王と女夫になり、あずまへ流れ下ったが、育ちが育ちとて気位高く、職人風情に連れ添うて、一生むなしく朽ち果つるを悔みながらに世を終った。その腹を分けた姉妹、おなじ胤とはいいながら、姉は母の血をうけて公家気質、妹は父の血をひいて職人気質、子の心がちがえば親の愛も違うて、母は姉贔屓、父は妹贔屓。思い思いに子どもの贔屓争いから、埒もない女夫喧嘩などしたこともあったよ。はははははは。

春彦　そう承われば桂どのが、日ごろ職人をいやしみ嫌い、世にきこえたる殿上人か弓取りならでは、夫

に持たぬと誇らるるも、母御(ははご)の血筋をつたえしため、血は争われぬものでござりまするな。

夜叉王　じゃによって、あれが何を言おうとも、滅多に腹は立てまいぞ。人を人とも思わず、気位(きぐらい)高う生まれたは、母の子なれば是非がないのじゃ。

（暮の鐘きこゆ。奥より楓は燈台を持ちて出づ。）

春彦　おお、取り紛れて忘れていた。これから大仁(おおひと)の町まで行って、このあいだ誂(あつら)えておいた鑿(のみ)と小刀(さすが)をうけ取って来ねばなるまいか。

かえで　きょうはもう暮れました。いっそ明日(あす)にしなされては……。

春彦　いや、いや、職人には大事の道具じゃ。一刻も早う取り寄せておこうぞ。

夜叉王　おお、職人はその心がけがのうてはならぬ。更けぬ間に、ゆけ、行け。

春彦　夜とは申せど通いなれた路、一晌ほどに戻って来まする。

（春彦は出てゆく。楓は門にたちて見送る。修禅寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、つづいて源の頼家卿、二十三歳。あとより下田五郎景安、十七八歳、頼家の太刀をささげて出づ。）

僧　これ、これ、将軍家のおしのびじゃ。粗相があっ

てはなりませぬぞ。

（楓ははッと平伏(ひれふ)す。頼家主従すすみ入れば、夜叉王も出で迎える。）

夜叉王　思いもよらぬお成りとて、なんの設けもござりませぬが、まずあれへお通りくださりませ。

（頼家は縁に腰をかける。）

夜叉王　して、御用の趣は。

頼家　問わずとも大方は察しておろう。わが面体(めんてい)を後のかたみに残さんと、さきにその方を召し出し、頼家に似せたる面(おもて)を作れと、絵姿までも遣(つか)わしておいたるに、日を経(ふ)るも出来(しゅったい)せず、幾たびか延引を申

し立てて、今まで打ち過ぎしは何たることじゃ。

五郎　多寡(たか)が面一つの細工、いかに丹精を凝らすとも、百日とは費すまい。お細工仰せつけられしは当春の初め、その後すでに半年をも過ぎたるに、いまだ献上いたさぬとはあまりの懈怠(けたい)、もはや猶予は相成らぬと、上様(うえさま)の御機嫌(ごきげん)さんざんじゃぞ。

頼家　予は生まれついての性急じゃ。いつまで待てど暮せど埒あかず、あまりに歯痒(はがゆ)う覚ゆるまま、この上は使いなど遣わすこと無用と、予がじきじきに催促にまいった。おのれ何ゆえに細工を怠りおるか。仔細をいえ、仔細を申せ。

夜叉王　御立腹おそれ入りましてござりまする。もったいなくも征夷大将軍、源氏の棟梁（とうりょう）のお姿を刻めとあるは、職のほまれ、身の面目、いかでか等閑（なおざり）に存じましょうや。御用うけたまわりてすでに半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜昼となく打ちましても、意にかなうほどのもの一つもなく、さらに打ち替え作り替えて、心ならずも延引に延引をかさねましたる次第、なにとぞお察しくださりませ。

頼家　ええ、催促の都度におなじことを……。その申しわけは聞き飽いたぞ。

五郎　この上はただ延引とのみで相済むまい。いつの

ころまでにはかならず出来するか、あらかじめ期日をさだめてお詫（わび）を申せ。

夜叉王　その期日は申し上げられませぬ。左に鑿をもち、右に槌を持てば、面はたやすく成るものと思し召すか。家をつくり、塔を組む、番匠（ばんしょう）なんどとは事変りて、これは生（しょう）なき粗木（あらき）を削り、男、女、天人、夜叉、羅刹（らせつ）、ありとあらゆる善悪邪正のたましいを打ち込む面作師。五体にみなぎる精力（せいりき）が、両の腕（かいな）におのずから湊（あつ）まる時、わがたましいは流るるごとく彼に通いて、はじめて面も作られまする。ただしその時は半月の後か、一月の後か、あるいは一年二

年の後か。われながら確（しか）とはわかりませぬ。

僧　これ、これ、夜叉王どの。上様は御自身も仰せらるるごとく、至って御性急でおわします。三島の社の放し鰻（うなぎ）を見るように、ぬらりくらりと取止めのないことばかり申し上げていたら、御痞癖がいよいよ募ろうほどに、こなたも職人冥利（みょうり）、いつのころまでと日を限（き）って、しかと御返事を申すがよかろうぞ。

夜叉王　じゃと言うて、出来ぬものはのう。

僧　なんの、こなたの腕で出来ぬことがあろう。面作師も多くあるなかで、伊豆の夜叉王といえば、京鎌倉までも聞えた者じゃに……。

夜叉王　さあ、それゆえに出来ぬと言うのじゃ。わしも伊豆の夜叉王と言えば、人にも少しは知られたもの。たといお咎め受きょうとも、己が心に染まぬ細工を、世に残すのはいかにも無念じゃ。

頼家　なに、無念じゃと……。さらばいかなる祟りを受きょうとも、早急には出来ぬというか。

夜叉王　恐れながら早急には……。

頼家　むむ、おのれ覚悟せい。

（癇癖募りし頼家は、五郎のささげたる太刀を引っ取って、あわや抜かんとす。奥より桂、走り出づ。）

かつら　まあ、まあ、お待ちくださりませ。

頼家　ええ、退(の)け、のけ。

かつら　まずお鎮まりくださりませ。面はただ今献上いたしまする。のう、父様。

（夜叉王は黙して答えず。）

五郎　なに、面はすでに出来しておるか。

頼家　ええ、おのれ。前後不揃(ふぞろ)いのことを申し立てて、予をあざむこうでな。

かつら　いえ、いえ、嘘(うそ)いつわりではござりませぬ。面はたしかに出来しておりまする。これ、父様。もうこの上は是非がござんすまい。

かえで　ほんにそうじゃ。ゆうべようやく出来したというあの面を、いっそ献上なされては……。

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫じゃ。名も惜しかろうが、命も惜しかろう。出来した面があるならば、早う上様にさしあげて、お慈悲をねがうが上分別じゃぞ。

夜叉王　命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知ったことではない。黙っておいやれ。

僧　さりとて、これが見ていらりょうか。さあ、娘御。その面を持って来て、ともかくも御覧に入れたがよいぞ。早う、早う。

かえで　あい、あい。

（かえでは細工場へ走り入りて、木彫の仮面(めん)を入れたる箱を持ち出づ。桂はうけ取りて頼家の前にささぐ。頼家は無言にて桂の顔をうちまもり、心少しく解けたる体なり。）

かつら　いつわりならぬ証拠、これ御覧くださりませ。

（頼家は仮面を取りて打ちながめ、思わず感嘆の声をあげる。）

頼家　おお、見事じゃ。よう打ったぞ。

五郎　上様おん顔に生写しじゃ。

頼家　むむ。（飽かず打(う)ち戍(まも)る）

僧　さればこそ言わぬことか。それほどの物が出来していながら、とこう渋っておられたは、夜叉王どのも気の知れぬ男じゃ。はははははは。

夜叉王　（形をあらためる）何分にもわが心にかなわぬ細工、人には見せじと存じましたが、こう相成っては致し方もござりませぬ。方々にはその面をなんと御覧なされまする。

頼家　さすがは夜叉王、あっぱれの者じゃ。頼家も満足したぞ。

夜叉王　あっぱれとの御賞美ははばかりながらおめがね違い、それは夜叉王が一生の不出来。よう御覧(ごろう)じ

ませ。面は死んでおりまする。

五郎　面が死んでおるとは……。

夜叉王　年ごろあまた打ったる面は、生けるがごとしと人も言い、われも許しておりましたが、不思議やこのたびの面に限って、幾たび打ち直しても生きたる色なく、たましいもなき死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎　そちはさように申しても、われらの眼にはやはり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉王　いや、いや、どう見直しても生（しょう）ある人ではござりませぬ。しかも眼（まなこ）に恨みを宿し、何者をか呪（のろ）うがごとき、怨霊怪異（おんりょうあやかし）なんどのたぐい……。

僧　あ、これ、これ、そのような不吉のことは申さぬものじゃ。御意（ぎょい）にかなえばそれで重畳（ちょうじょう）、ありがたくお礼を申されい。

頼家　むむ。とにもかくにもこの面は頼家の意にかのうた。持ち帰るぞ。

夜叉王　強（た）って御所望（ごしょもう）とござりますれば……。

頼家　おお、所望じゃ。それ。

（頼家は頤（あご）にて示せば、かつら心得て仮面を箱に

納め、すこし媚（こび）を含みて頼家にささぐ。頼家はさらにその顔をじっと視る。）

頼家　いや、なおかさねて主人（あるじ）に所望がある。この娘を予が手もとに召し仕（つか）いとう存ずるが、奉公さする心はないか。

夜叉王　ありがたい御意にござりまするが、これは本人の心まかせ、親の口から御返事は申し上げられませぬ。

（桂は臆せず、すすみ出づ。）

かつら　父様。どうぞわたしに御奉公を……。

頼家　うい奴じゃ。奉公をのぞむと申すか。

かつら　はい。

頼家　さらばこれよりその面をささげて、頼家の供してまいれ。

かつら　かしこまりました。

（頼家は起つ。五郎も起つ。桂もつづいて起つ。楓は姉の袂（たもと）をひかえて、心もとなげに囁（ささや）く。）

かえで　姉さま。おまえは御奉公に……。

かつら　おまえは先ほど、夢のような望みと笑うたが、夢のような望みが今かのうた。

（かつらは誇りがに見かえりて、庭に降り立つ。）

僧　やれ、やれ、これで愚僧もまず安堵（あんど）いたしました。夜

叉王どの、あすまた逢(あ)いましょうぞ。
（頼家は行きかかりて物につまずく。桂は走り寄りてその手を取る。）

頼家　おお、いつの間にか暗うなった。
（僧はすすみ出でて、桂に燈籠を渡す。桂は仮面の箱を僧にわたし、われは片手に燈籠を持ち、片手に頼家をひきて出づ。夜叉王はじっと思案の体なり。）

かえで　父さま、お見送りを……。
（夜叉王は初めて心づきたるごとく、娘とともに門口に送り出づ。）

五郎　そちへの御褒美は、あらためて沙汰するぞ。

（頼家らは相前後して出でゆく。夜叉王は起ち上りて、しばらく黙然としていたりしが、やがてつかつかと縁にあがり、細工場より槌を持ち来たりて、壁にかけたるいろいろの仮面を取り下し、あわや打ち砕かんとす。楓はおどろきて取り縋る。）

かえで　ああ、これ、なんとなさる。おまえは物に狂われたか。

夜叉王　せっぱ詰まりて是非におよばず、拙き細工を献上したは、悔んでも返らぬわが不運。あのような面が将軍家のおん手に渡りて、これぞ伊豆の住人

夜叉王が作と宝物帳にも記（しる）されて、百千年の後までも笑いをのこさば、一生の名折れ、末代の恥辱、所詮（しょせん）夜叉王の名は廃（すた）った。職人もきょう限り、再び槌は持つまいぞ。

かえで　さりとは短気でござりましょう。いかなる名人上手でも細工の出来不出来は時の運。一生のうちに一度でもあっぱれ名作が出来ようならば、それがすなわち名人ではござりませぬか。

夜叉王　むむ。

かえで　拙い細工を世に出したをそれほど無念と思し召さば、これからいよいよ精出して、世をも人をも

おどろかすほどの立派な面を作り出し、恥を雪（すす）いでくださりませ。

（かえでは縋りて泣く。夜叉王は答えず、思案の眼を瞑（と）じている。日暮れて笛の声遠くきこゆ。）

第二場

おなじく桂川のほとり、虎渓橋（こけいきょう）の袂。川辺には柳幾本（いくもと）たちて、芒（すすき）と芦（あし）とみだれ生いたり。橋を隔てて修禅寺の山門みゆ。同じ日の宵。

（下田五郎は頼家の太刀を持ち、僧は仮面(めん)の箱をかかえて出づ。）

五郎　上様は桂どのと、川辺づたいにそぞろ歩き遊ばされ、お供のわれわれは一足先へまいれとの御意であったが、修禅寺の御座所ももはや眼のまえじゃ。この橋の袂(たもと)にたたずみて、お帰りを暫時相待とうか。

僧　いや、いや、それはよろしゅうござるまい。桂殿という嫋女(たおやめ)をお見出しあって、浮れあるきに余念もおわさぬところへ、われわれのごとき邪魔外道(げどう)が附き纏(まと)うては、かえって御機嫌を損ずるでござろうぞ。

五郎　なにさまのう。

（とは言いながら、五郎はなお不安の体にてたたずむ。）

僧　ことに愚僧はお風呂（ふろ）の役、早う戻（もど）って支度をせねばなるまい。

五郎　お風呂とておのずと沸いて出づる湯じゃ。支度を急ぐこともあるまいに……。まずお待ちゃれ。

僧　はて、お身にも似合わぬ不粋をいうぞ。若き男女（おとこおうな）がむつまじゅう語ろうているところに、法師や武士は禁物じゃよ。はははは。さあ、ござれ、ござれ。

（無理に袖をひく。五郎は心ならずも曳かるるままに、打ち連れて橋を渡りゆく。月出づ。桂は燈籠を持ち、頼家の手をひきて出づ。）

頼家　おお、月が出た。河原づたいに夜ゆけば、芒にまじる芦の根に、水の声、虫の声、山家（やまが）の秋はまたひとしおの風情（ふぜい）じゃのう。

かつら　馴（な）れてはさほどにもおぼえませぬが、鎌倉山の星月夜とは事変りて、伊豆の山家の秋の夜は、さぞお寂しゅうござりましょう。

（頼家はありあう石に腰打ちかけ、桂は燈籠を持ちたるまま、橋の欄に凭（よ）りて立つ。月明らかにし

て虫の声きこゆ。）

頼家　鎌倉は天下の覇府（はふ）、大小名の武家小路、甍（いらか）をならべて綺羅（きら）を競えど、それはうわべの栄えにて、うらはおそろしき罪の巷（ちまた）、悪魔の巣ぞ。人間の住むべきところでない。鎌倉などへは夢も通わぬ。（月を仰ぎて言う）

かつら　鎌倉山に時めいておわしなば、日本一の将軍家、山家そだちのわれわれは下司（げす）にもお使いなされまいに、御果報拙（つたな）いがわたくしの果報よ。忘れもせぬこの三月、窟詣（いわやもう）での下向路（げこうみち）、桂谷の川上で、はじめて御目見得をいたしました。

頼家　おお、その時そちの名を問えば、川の名とおなじ桂と言うたな。

かつら　まだそればかりではございませぬ。この窟のみなかみには、二本（ふたもと）の桂の立木ありて、その根よりおのずから清水を噴き、末は修禅寺にながれて入れば、川の名を桂とよび、またその樹を女夫（めおと）の桂と昔よりよび伝えておりますると、お答え申し上げましたれば、おまえ様はなんと仰せられました。

頼家　非情の木にも女夫はある。人にも女夫はありそうな……と、つい戯（たわむ）れに申したのう。

かつら　お戯れかは存じませぬが、そのお詞（ことば）が冥加（みょうが）

にあまりて、この願(がん)かならずかなうようと、百日のあいだ人にも知らさず、窟へ日参いたせしに、女夫の桂のしるしありて、ゆくえも知れぬ川水も、嬉(うれ)しき逢瀬(おうせ)にながれ合い、今月今宵おん側近う、召し出されたる身の冥加……。

頼家　武運つたなき頼家の身近うまいるがそれほどに嬉しいか。そちも大方は存じておろう。予には比企(ひき)の判官能員(はんがんよしかず)の娘若狭(わかさ)といえる側女(そばめ)ありしが、能員ほろびしその砌(みぎり)に、不憫(ふびん)や若狭も世を去った。今より後はそちが二代の側女、名もそのままに若狭と言え。

かつら　あの、わたくしが若狭の局（つぼね）と……。ええ、ありがとうござります。

頼家　あたたかき湯の湧（わ）くところ、温かき人の情も湧く。恋をうしないし頼家は、ここに新しき恋を得て、心の痛みもようやく癒えた。今はもろもろの煩悩（ぼんのう）を断って、安らけくこの地に生涯を送りたいものじゃ。さりながら、月には雲の障（さわ）りあり。その望みもはかなく破れて、予に万一のことあらば、そちの父に打たせたるかのおもてを形見と思え。叔父の蒲殿（かばどの）は罪のうして、この修禅寺の土となられた。わが運命も遅かれ速かれ、おなじ路をたどろうも知れぬぞ。

（月かくれて暗し。籠手（こて）、臑当（すねあて）、腹巻したる軍兵（つわもの）
二人、上下よりうかがい出でて、芒むらに潜む。
虫の声にわかにやむ。）

かつら　あたりにすだく虫の声、吹き消すように止み
ましたは……。

頼家　人やまいりし。心をつけよ。

（金窪兵衛尉行親、三十余歳。烏帽子（えぼし）、直垂（ひたたれ）、籠
手、臑当にて出づ。）

行親　上（うえ）、これに御座遊ばされましたか。

頼家　誰じゃ。

（桂は燈籠をかざす。頼家透（すか）しみる。）

行親　金窪行親でござりまする。

頼家　おお、兵衛か。鎌倉表より何としてまいった。

行親　北条殿のおん使いに……。

頼家　なに、北条殿の使い……。さてはこの頼家を討とうがためな。

行親　これは存じも寄らぬこと。御機嫌伺いとして行親参上、ほかに仔細もござりませぬ。

頼家　言うな、兵衛。物の具に身をかためて夜中の参入は、察するところ、北条の密意をうけて予を不意撃ちにする巧みであろうが……。

行親　天下ようやく定まりしとは申せども、平家の残

党ほろび殲(つく)さず。かつは函根(はこね)より西の山路に、盗賊ども徘徊(はいかい)する由きこえましたれば、路次の用心としてかようにいかめしゅう扮装(いでた)ち申した。上に対したてまつりて、不意撃ちの狼藉(ろうぜき)なんど、いかで、いかで……。

頼家　たといいかように陳ずるとも、憎き北条の使いなんどに対面無用じゃ。使いの口上聞くにおよばぬ。帰れ、かえれ。

（行親は騒がず。しずかに桂をみかえる。）

行親　これにある女性(にょしょう)は……。

頼家　予が召仕いの女子(おなご)じゃよ。

行親　おん謹みの身をもって、素性も得知れぬ賤しの女子どもを、おん側近う召されしは……。

（桂は堪えず、すすみ出づ。）

かつら　兵衛どのとやら、お身は卜者か人相見か。初見参のわらわに対して、素姓賤しき女子などと、迂闊に物を申されな。妾は都のうまれ、母は殿上人にも仕えし者ぞ。まして今は将軍家のおそばに召されて、若狭の局とも名乗る身に、一応の会釈もせで無礼の雑言は、鎌倉武士というにも似ぬ、さりとは作法をわきまえぬ者のう。

（冷笑われて、行親は眉をひそめる。）

行親　なに。若狭の局……。して、それは誰に許された。

頼家　おお、予が許した。

行親　北条どのにも謀らせたまわず……。

頼家　北条がなんじゃ。おのれらは二口目には北条という。北条がそれほどに尊いか。時政も義時も予の家来じゃぞ。

行親　さりとて、尼御台もおわしますに……。

頼家　ええ、くどい奴。おのれらの言うこと、聴くべき耳は持たぬぞ。退れ、すされ。

行親　さほどにおむずかり遊ばされては、行親申し上

ぐべきようもござりませぬ。仰せに任せて今宵はこのまま退散、委細は明朝あらためて見参の上……。

頼家　いや、重ねて来ること相成らぬぞ。若狭、まいれ。

（頼家は起ち上りて桂の手を取り、打ち連れて橋を渡り去る。行親はあとを見送る。芒のあいだに潜みし軍兵（つわもの）出づ。）

兵一　先刻より忍んで相待ち申したに、なんの合図もござりませねば……。

兵二　手を下すべき機（おり）もなく、空しく時を移し申した。

行親　北条殿の密旨を蒙（こうむ）り、近寄って討ちたてまつ

らんと今宵ひそかに伺候したるが、さすがは上様、早くもそれと覚（さと）られて、われに油断を見せたまわねば、無念ながらも仕損じた。この上は修禅寺の御座所へ寄せかけ、多人数一度にこみ入って本意を遂ぎょうぞ。上様は早業の達人、近習（きんじゅう）の者どもにも手だれあり。小勢の敵と侮りて不覚を取るな。場所は狭し、夜いくさじゃ。うろたえて同士撃（どしう）ちすな。

兵　はっ。

行親　一人はこれより川下へ走せ向うて、村の出口に控えたる者どもに、即刻かかれと下知（げじ）を伝えい。

兵一　心得申した。

（一人は下手に走り去る。行親は一人を具して上手に入る。木かげより春彦、うかがい出づ。）

春彦　大仁(おおひと)の町から戻(もど)る路々(みちみち)に、物の具したる兵者(つわもの)が、ここに五人かしこに十人屯(たむろ)して、出入りのものを一々詮議するは、合点(がてん)がゆかぬと思うたが、さては鎌倉の下知によって、上様を失いたてまつる結構な。さりとは大事じゃ。

（遠近(おちこち)にて寝鳥(ねとり)のおどろき起つ声。下田五郎は橋を渡りて出づ。）

五郎　常はさびしき山里の、今宵は何とやらん物さわがしく、事ありげにも覚ゆるぞ。念のために川の

上下（かみしも）を一わたり見廻（みまわ）ろうか。

春彦　五郎どのではおわさぬか。

五郎　おお、春彦か。

（春彦は近づきてささやく。）

五郎　や、なんと言う。金窪の参入は……。上様を……。しかと左様か。むむ。

（五郎はあわただしく引っ返しゆかんとする時、橋の上より軍兵一人長巻（ながまき）をたずさえて出で、無言にて撃ってかかる。五郎は抜きあわせて、たちまち斬（き）って捨つ。軍兵数人、上下より走り出で、五郎を押っ取りまく。）

五郎　やあ、春彦。ここはそれがし受け取った。そちは御座所へ走せ参じて、この趣を注進せい。

春彦　はっ。

（春彦は橋をわたりて走り去る。五郎は左右に敵を引き受けて奮闘す。）

第三場

もとの夜叉王の住家。夜叉王は門（かど）にたちて望む。修禅寺にて早鐘を撞く音きこゆ。

（向うより楓は走り出づ。）

かえで　父様。夜討ちじゃ。

夜叉王　おお、むすめ。見て戻ったか。

かえで　敵は誰やらわからぬが、人数はおよそ二三百人、修禅寺の御座所へ夜討ちをかけましたぞ。

夜叉王　にわかにきこゆる人馬の物音は、何事かと思うたに、修禅寺へ夜討ちとは……。平家の残党か、鎌倉の討手か。こりゃ容易ならぬ大変じゃのう。

かえで　生憎（あやにく）に春彦どのはありあわさず、なんとしたことでござりましょうな。

夜叉王　われわれがうろうろ立ち騒いだとてなんの役にも立つまい。ただそのなりゆきを観ているばかりじゃ。まさかの時には父子（おやこ）が手をひいて立ち退くまでのこと。平家が勝とうが、源氏が勝とうが、北条が勝とうが、われわれにはかかり合いのないことじゃ。

かえで　それじゃと言うて不意のいくさに、姉様（あねさま）はなんとなさりょうか。もし逃げ惑うて過失（あやまち）でも……。

夜叉王　いや、それも時の運じゃ、是非もない。姉にはまた姉の覚悟があろうよ。

（寺鐘と陣鐘とまじりてきこゆ。楓は起ちつ居つ、

幾たびか門に出でて心痛の体（てい）。向うより春彦走り出づ。）

かえで　おお、春彦どの。待ちかねました。

春彦　寄せ手は鎌倉の北条方、しかも夜討ちの相談を、測らず木かげで立聴きして、その由を御注進申し上ぎょうと、修禅寺までは駈（か）けつけたが、前後の門はみな囲まれ、翼（つばさ）なければ入ることかなわず、残念ながらおめおめ戻った。

かえで　では、姉様の安否も知れませぬか。

春彦　姉はさておいて、上様の御安否さえもまだわからぬ。小勢ながらも近習の衆が、火花をちらして

追っつ返しつ、今が合戦最中じゃ。

夜叉王　なにを言うにも多勢に無勢、御所方とても鬼神ではあるまいに、勝負は大方知れてある。とても逃れぬ御運の末じゃ。蒲殿といい、上様と言い、いかなる因縁かこの修禅寺には、土の底まで源氏の血が沁みるのう。

（寺鐘烈しくきこゆ。春彦夫婦は再び表をうかがい見る。）

かえで　おお、おびただしい人の足音……。鎬を削る太刀の音……。

春彦　ここへも次第に近づいてくるわ。

（桂は頼家の仮面を持ちて顔には髪をふりかけ、直垂（ひたたれ）を着て長巻を持ち、手負（てお）いの体にて走り出で、門口に来たりて倒る。）

春彦　や、誰やら表に……。

（夫婦は走り寄りて扶（たす）け起し、庭さきに伴い入るれば、桂はまた倒れる。）

春彦　これ、傷は浅うござりまするぞ。心を確かに持たせられい。

かつら　（息もたゆげに）おお妹……。春彦どの……。父様はどこにじゃ。

夜叉王　や、なんと……。

（夜叉王は怪しみて立ちよる。桂は顔をあげる。
みなみな驚く。）
春彦　や、侍衆（さむらいしゅう）とおもいのほか……。
夜叉王　おお、娘か。
かえで　姉さまか。
春彦　して、この体（てい）は……。
かつら　上様お風呂を召さるる折から、鎌倉勢が不意の夜討ち……。味方は小人数、必死にたたかう。女でこそあれこの桂も、御奉公はじめの御奉公納めに、この面（おもて）をつけてお身がわりと、早速（さそく）の分別……。月の暗きを幸いに打物とって庭におり立ち、左金吾

頼家これにありと、呼ばわり呼ばわり走せ出づれば、むらがる敵は夜目遠目に、まことの上様ぞと心得て、うち洩（も）らさじと追っかくる。

夜叉王　さては上様お身替りと相成って、この面にて敵をあざむき、ここまで斬り抜けてまいったか。（血に染みたる仮面（めん）を取りてじっと視る）

春彦　われわれすらも侍衆と見あやまったほどなれば、敵のあざむかれたも無理ではあるまい。

かえで　とは言うものの、あさましいこのお姿……。姉様死んで下さりまするな。（取り縋りて泣く）

かつら　いや、いや。死んでも憾（うら）みはない。賤（しず）が伏屋（ふせや）

でいたずらに、百年千年生きたとて何となろう。たとい半晌一晌でも、将軍家のおそばに召し出され、若狭の局という名をも給わるからは、これで出世の望みもかのうた。死んでもわたしは本望じゃ。

（云いかけて弱るを、春彦夫婦は介抱す。夜叉王は仮面をみつめて物言わず。以前の修禅寺の僧、頭より袈裟をかぶりて逃げ来たる。）

僧　大変じゃ、大変じゃ。かくもうて下され、隠もうてくだされ。（内に駈け入りて、桂を見てまたおどろく）やあ、ここにも手負いが…。おお、桂殿……。こなたもか。

かつら　して、上様は……。

僧　お悼（いた）わしや、御最期じゃ。

かつら　ええ。（這い起きてきっと視る）

僧　上様ばかりか、御家来衆も大方は斬り死……。わしらも傍杖（そばづえ）の怪我せぬうちと、命からがら逃げて来たのじゃ。

春彦　では、お身がわりの甲斐（かい）もなく……。

かえで　ついにやみやみ御最期か。

（桂は失望してまた倒る。楓は取りつきて叫ぶ。）

かえで　これ、姉さま。心を確かに……。のう、父様。姉さまが死にまするぞ。

（今まで一心に仮面をみつめたる夜叉王、はじめて見かえる。）

夜叉王　おお、姉は死ぬるか。姉もさだめて本望であろう。父もまた本望じゃ。

かえで　ええ。

夜叉王　幾たび打ち直してもこの面に、死相のありありと見えたるは、われ拙きにあらず。鈍きにあらず。源氏の将軍頼家卿がかく相成るべき御運とは、今という今、はじめて覚った。神ならでは知ろしめされぬ人の運命、まずわが作にあらわれしは、自然の感応、自然の妙、技芸神（しん）に入るとはこのことよ。伊豆

の夜叉王、われながらあっぱれ天下一じゃのう。（快げに笑う）

かつら　（おなじく笑う）わたしもあっぱれお局様じゃ。死んでも思いおくことない。ちっとも早う上様のおあとを慕うて、冥土（めいど）のおん供……。

夜叉王　やれ、娘。わかき女子が断末魔の面、後の手本に写しておきたい。苦痛を堪（こら）えてしばらく待て。

春彦、筆と紙を……。

春彦　はっ。

（春彦は細工場に走り入りて、筆と紙などを持ち来たる。夜叉王は筆を執る。）

夜叉王　娘、顔をみせい。

かつら　あい。

（桂は春彦夫婦に扶けられて這いよる。夜叉王は筆を執りて、その顔を模写せんとす。僧は口のうちにて念仏す。）

――幕――

底本：「日本の文学　77　名作集（一）」中央公論社
１９７０（昭和45）年７月５日初版発行
初出：「文芸倶楽部」
１９１１（明治44）年１月
入力：土屋隆
校正：小林繁雄
２００６年４月30日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。